

主体的に考える力を高める国語学習指導 ～問いを生かした対話的学びを通して～

要約：

今回の改定で、小学校国語科の目標に具体的な指針が示されている。その一つとして、「(2) 日常生活における人とのかかわりの中で伝えあう力を高め、思考力や想像力を養う」と定義されている。本校では、本年度国語科の学力向上において「思考力・表現力の育成」を目指し、取り組んでいる。現代の社会において、自分の考えもち、伝えあう「思考力」「コミュニケーション力」はまさに求められている力であると考え。本学級の児童は、朝の会の一分間スピーチやグループ学習を通して自分の考えを述べてきた。しかしその中でも、自分の思いや考えをつくったり、述べたりすることが苦手である児童も多い。国語科の学習におけるアンケート調査の結果、『めあてや問いを解決するために、考えることが好きですか』の問いには、29人中12人が「あまり」「ぜんぜん」と答えている。また、『自分の考えを相手に伝える(話す)ことが好きですか』の問いには、9人が『あまり』と答えている。以上のことから、考えをつくり、伝えることに抵抗を感じている児童が約3分の1に上ることが分かった。そこで、文章から感じ、考え、表現する楽しさを知り、自信をもって意欲的に学習に取り組むことができる児童の育成を目指し、研究テーマを「主体的に考える力を高める国語学習指導」と設定し、研究を進めていくことにした。そのために、以下のことを重点に置いて研究を進めていくことにした。

- ① 書き手との対話を通して、「問い」をもつ。
- ② 叙述をもとに、登場人物の感情や想像を言葉にし、自分の考えをまとめる。
- ③ 目的や場面に応じた交流活動を通し、自分の考えを相手に伝える。
- ④ 他者から得た新しい発想や、考えに気づき、自分の考えを深める。

第4学年「ごんぎつね」「プラタナスの木」の実践に取り組んだ結果、次のような成果(○)と課題(●)を得た。

- 人物関係図や一枚のシートに考えをまとめる「プラタナスシート」のような言語活動は、動作的で子どもたちも意欲を持って取り組むことができ、また単元を貫いて活動したため、見通しをもって学習をする上では有効だった。
- 「テキストとの対話」「他者との対話」「自分との対話」の流れを通して学習させることで、叙述をもとにした考えのつくり方を身に着ける上では有効だった。
- グループでの活動を通して学習を深めさせることで、発言する機会が増え、学習に進んで参加する姿勢をつくることのできた上で有効だった。
- 読み取りが苦手な子どもにとっては、叙述をもとに考える活動が難しかったため、自尊心の低下につながっていることがあった。そのような児童に対してヒントシートを配るなどの個別の支援の強化が必要である。
- ゆさぶる発問においては、思考を深めさせる発問であるかどうかを吟味し、工夫していく必要がある。

キーワード：問い 3つの対話

1 主題設定の理由

(1) 子どもの実態から

本学級の子どもたちは、休み時間や空き時間に読書をするほど本を読むことは好きである。また、どの分類をよく読むか尋ねると、ほとんどの子どもが創作文を読んでいることが分かった。アンケート調査では「国語の学習が好きですか」

	めあてや問いを解決するために、考えることが好きですか。	自分の考えを相手に伝える(話す)ことが好きですか。
好き・だいたい	17人	20人
あまり・ぜんぜん	12人	9人

【図1】事前アンケート調査

との問いに、29人中21人が「とても」「だいたい」と答えているため、ほとんどの子どもが国語科学習に意欲をもって取り組んでいることが分かる。しかし、学習の問いに対する自分の考えを文に表したり言葉にしたりすることを苦手を感じる子どもが学級の3分の1みられる。算数科のように答えがはっきりしていない分、自由な発想がもとめられ、文章から感じたり想像したりすることに苦手意識があるがゆえに、表現がうまくできないで苦しんでいる姿もある。また、発表の際には「間違っているかもしれない」との発言がよく聞かれ、自由な発想を自ら縛り、表現する自信をもつことができていないように感じられる。そこで、このような子どもの実態から、本主題を設定し、研究を進めることは、進んで学ぼうとする子どもの育成を目指す上でも意義深い。

(2) 指導上の反省・問題点から

自分自身の国語科学習の指導法としては、学習の課題設定において、単元の中で場面毎や段落に分けて、単発的にめあてをもたせて学習することが多かった。また、子どもに主体的に問いをもたせることができずに、教師が設定しためあてに向かって読み取っていく方法で学ばせることが多かった。そのため、学習に対して「なぜ」「どうして」というような『問い』をもてないまま、漠然とした考えのもと取り組んでいたため、意欲的に学ぼうとする姿勢があまり育っていない。そのようなことから、『問い』をもたせることで学習内容について疑問をもち、自ら解決しようとする「主体的に考える姿」を育てる必要性があると考えた。

(3) 国語化教育の視点から

今回改定される新指導要領から、目標として具体的に「(2) 日常生活における人とのかかわりの中で伝えあう力を高め、思考力や想像力を養う」と定義されている。特に、中学年の目標では、「(2) 筋道を立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人とのかかわりの中で伝えあう力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする」とされている。今までの、筋道を立てて話す能力に加え、豊かに感じたり想像したりする力が求められていることが分かる。文章の中から登場人物の行動・行為の背景にある心情や関係などを取り出し、自分の発想を膨らませ、伝えていくことをねらいとした本研究は、国語科教育の視点を達成する上でも意義深い。

(4) 社会の要請・現代教育の動向から

現代の社会において、ますます進むグローバル化への移行とともに、一人ひとりの「生きる力」が求められている。しかし、日本人がもつ、相手のことをおもんばかりがゆえに自分の主張を控える風潮から、自分の考えを主張する力がますます弱くなってきている傾向がある。また、「コミュニケーション障害」という言葉がつくられるほど、人との

関わりを苦手としている人の増加が著しいのが現状である。知識・技能を活用し、考えたり、表現したりする力を育成することは、現行学習指導要領がねらいとするものであるが、必ずしも十分実現していない状況にあると考える。日常生活においても、グループになった場合、率先して意見をあげていく子どもがいる一方で、他者の意見に合わせ、自分の意見を言わない子どもなど二極化の傾向がみられる。これからの社会で生きていく上でも、主体的に考える力の育成は、人間関係の形成においても意義深い。

2 主題の意味

(1) 主題「主体的に考える力を高める」とは

- ① 「主体的」とは、行為者が対象に向かって進んで働きかけをすることである。
- ② 「主体的に考える力」とは、対象であるテキストに対して見出した「問い」の解決へ進んで思考力を働かせることである。また、思考活動を活性化させるために、あらゆる表現方法を用いて自分の考えを書いたり伝えたりする力のことである。具体的に次の3つを考える。
 - ア 考える力とは、テキストとの対話を通して、自分の考えをつくる力
 - イ 深める力とは、友達との交流から新たな考えを広げたり、自分の考えを振り返ったりする力
 - ウ 表現する力とは、交流の場面で発表したり、自分の考えを視覚的に表したりする力
- ③ 「主体的に考える力を高める」とは、この3つの力を連動させ、学習課題に対して自分から進んで解決しようとする子どもを育てることである。以下のような子どもの姿とする。

○テキストから「なぜこんなことになったのか」「どうしてそのようなことがおこったのか」などの課題を見つけることができる。
○叙述をもとに考え、あらゆる表現方法を用いて、学習課題に対する自分の答えを導き出していこうとする。

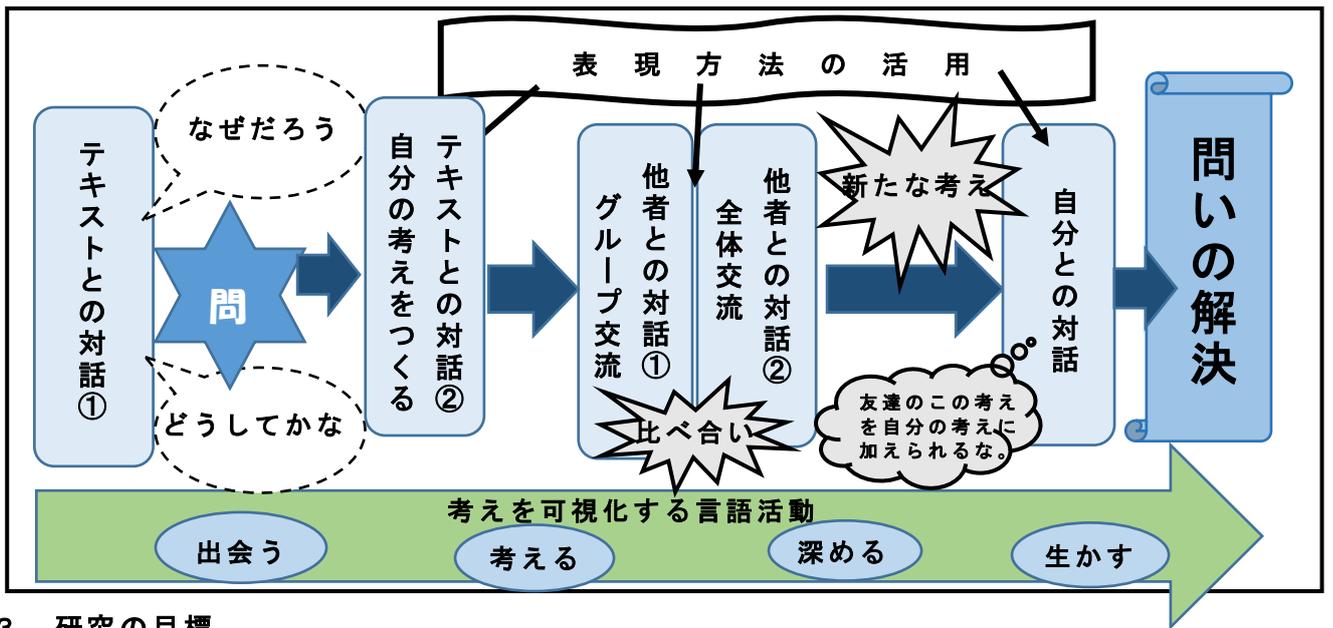
(2) 副主題「問いを生かした対話的な学び」について

- ① 「問い」とは、教材文に子どもたちが課題意識をもって、自ら解決活動に取り組む入り口となる疑問のこと。
 - ア 問いの条件：基本的に「なぜ～」で問い、「～だから」と答えることができる。行動・行為の背景にある「心情」に関わっている問い
 - イ 問いを解決するときの表現の方法、視点：

順序「まず、次に、最後に」
比べる「○は△より・・・、○は△に比べると・・・」
共通点「■と●から分かることは・・・」
関係「AとBの関係は・・・」
視点「★から考えると～ですが、◆から考えると・・・」
理由と予想「□と思います。なぜなら・・・」「もし、■なら・・・」

- ② 対話的な学びとは、以下の3つの対話活動のことである。
 - ア テキストとの対話・・・教材文をもとに自分の考えをつくること。
 - イ 友達との対話・・・交流をもとに友達との考えの違いに気づいたり、考えを広げたりすること。
 - ウ 自分との対話・・・自分の考えの変容や深まりを可視化してまとめること。つまり、問いを生かした対話的活動とは、3つの対話を通して「問い」の解決

に向かっていく活動のことである。具体的には、以下に示す図のように考える。



3 研究の目標

国語科学習において、「問い」を生かした対話的な活動を通して、主体的に学ぼうとする子どもを育てる指導の在り方を究明する。

4 研究の仮説

文学的文章の学習において、「問い」を自ら見出し「問い」の解決のための3つの対話活動を仕組みば、子どもの主体的に考える力を高めることができるであろう。

5 仮説検証の内容と方法

(1) 検証の対象 小郡市立のぞみが丘小学校
 研究対象学級 第4学年2組 (29名)

(2) 検証の内容・方法

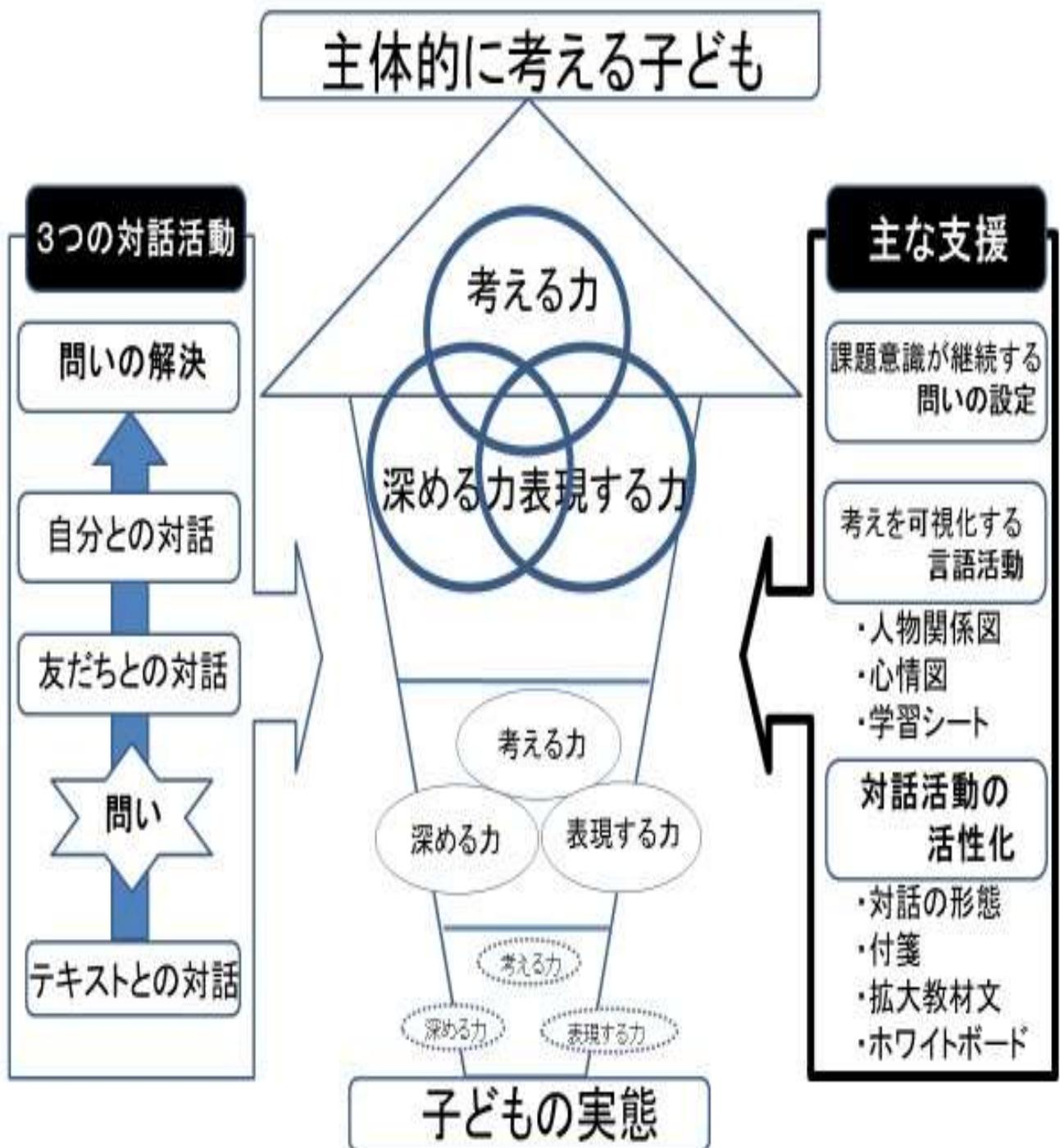
- ① 問いに対して自分の考えをつくったり、友達と新たな考えをみつけだそうとしたりと興味・関心をもって取り組むことができたか。
 ア アンケートの結果から分析する。
- ② 問いの解決に向けて、登場人物や情景の読み取りをしたり、友達の意見を聞いて自分の考えを膨らませたりすることができたか。
 イ 学習プリントやワークシートから分析する。
- ③ 自分の考えをあらゆる表現方法を用いて、積極的に伝えたり、発表したりすることができたか。
 ウ グループワークでの様子から分析する。

内容 \ 方法	アンケート	学習プリント	ワークシート	グループワーク
①	○			
②		○	○	
③				○

7 研究の計画

5月	研究理論	10月	実証およびデータ収集・データ分析
6月	実態調査・観察	11月	仮説の見直し、修正授業
7月	教材分析	12月	実証およびデータ収集・データ分析
8月	教材構成	1月	研究のまとめ
9月	教材構成	2月	研究報告

8 研究の構想図



9 研究の実際

実践Ⅰ 第4学年「ごんぎつね」（10月実施）

（1）本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、学習の「問い」をもって、登場人物の気持ちを叙述をもとに考え、人物関係図に表すことができる子どもをめざした。そのために、場面ごとに中心となる「問い」を見つけ、3つの対話を通して、ごんと兵十の互いを思う気持ちの変化を人物関係図に表す活動を積み重ねていった。

（2）指導の実際（本時6/8これはしまったと反省するごんの気持ちについて考える場面）

【ねらいとする子どもの姿】

自分のせいでひどい目にあった兵十に対して、申し訳ないことをした、もっとつぐないたいというごんの気持ちの変化をとらえることができる。

このような姿をめざして、次の活動を仕組んだ。

問いを見つける活動	・本文中から「なぜだろう」と思う中心となる文を探す活動
テキストとの対話	・「問い」に対する自分の考えを叙述をもとに考える活動。
他者との対話	・自分の考えを他者と交流し、考えを広げたり深めたりする活動。
自分との対話	・対話を通してまとまった考えを人物関係図に表す活動。

①出会う段階【テキストとの対話①】

まず、前時場面と本時場面の気持ちの変化に着目しながら音読をした。そして、前時までの大きな違いはつぐないをし始めたところに気づかせた。しかし、いいことをしているはずなのに「これはしまった」とごんは述べている。ここに本時の焦点を当て、「問い」として『なぜごんは「これはしまった」と後かいしたのだろうか。』と確認し、学習に入った。

《考察》

前時との違いを見つけることはできたが、次のことが課題として明らかになった。

●本時の場面での疑問に思う「問い」については、教師先導でないとでてこなかった。

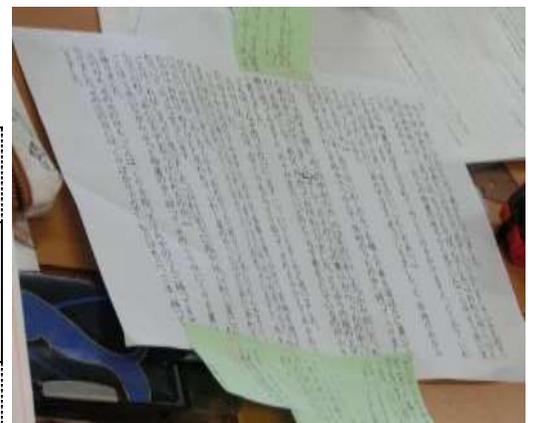
②考える段階【テキストとの対話②】【他者との対話①】

この段階では、まず、「テキストとの対話②」として、「問い」に対する自分の考えをもつ活動を仕組んだ。次に、「他者との対話①」として、グループで「問い」に対する考えを広げたり深めたりする活動を仕組んだ。その手順は次のとおりである。

- 1) 本文に、「問い」の答えとなるごんの行動や気持ちを見つけて線を引き、付箋に自分の考えを書く。
- 2) A3用紙に拡大した本文に、それぞれが引いた線を書き入れたり付箋を貼ったりして、自分の考えを交流する。（写真1）
- 3) 友達の意見を聞きながら、自分と違う考えはワークシートにメモをし、考えを共有する。

《考察》

前時までの積み上げの成果として、テキストとの対話や他者との対話の活動においては、



【写真1】付箋を貼ったA3用

子どもたちも理解しスムーズに取り組むことができた。また、自分の考えをほとんどの子どもが書くことができていた。しかし次のような課題も明らかになった。

- 「問い」に対する答えを考える上で、叙述に線を引いて考えることはできたが、意見を交流するとき、なぜそこを選んだかなどの理由まで書くことができなかった。
- 「他者との対話①」において、何を話し合うのか目的が明確ではなかったため、ただ意見を交流するだけになってしまっていた。

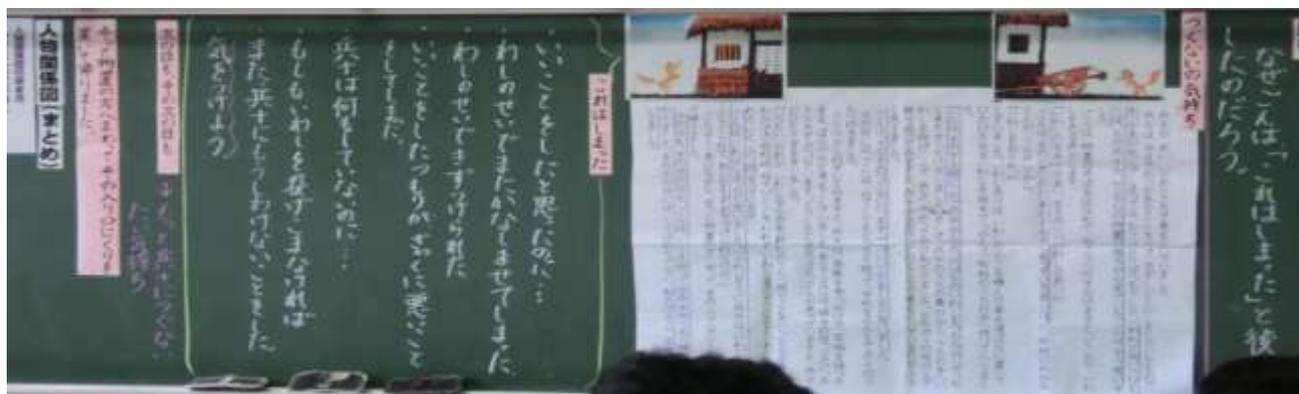
④ 深める段階【他社との対話②】

この段階では、全体交流を通して「問い」についての考えを深める活動を仕組んだ。さらに、教師のゆさぶり発問により、考えを強化したり、確信をもたせたりする活動を仕組んだ。手順は次のとおりである。(写真2)

1) 付箋に書いた考えや、友達との交流を通して考えた、「問い」に対する考えを発表する。

2) 思考をゆさぶる発問に対して考える。

『(兵十に申し訳ないことをしたとごんは後悔していることに気づいたのち)では、もうごんはくりや松たけを持っていくことをやめましたよね。』



《考察》

【写真2】深める段階の板書

学級全体での交流では、多くの子どもが進んで自分の考えを発表することができていたが、次のような課題が明らかになった。

- 思考を揺さぶる発問をすることで、子どもの考えを深めることができた一方、それが分かる叙述を選択させるなどの、理由づけまで踏み込むことができなかった。

⑤ 生かす段階【自分との対話】

本時で捉えたごんの気持ちをもとに、人物関係図に心情曲線と、そのときのごんの気持ちを吹き出しに書いてまとめる活動を仕組んだ。(写真3)

《考察》

テキストや他者との対話を通して想像した自分の考えを、線や吹き出しに表すことができていた。しかし、ごんの「つぐないたい気持ち」を線に表すことができ



【写真3】人物関係図

ていない子どももいたため、十分な読み取りができていなかったと考えられた。

実践Ⅱ 第4学年「プラタナスの木」(11月実施)

(1) 本単元の指導にあたって

実践Ⅰでの課題をふまえ、実践Ⅱでは、次のような改善を行い、実践に取り組んだ。

- 問いを子どもたち自身にもたせるため、「問いシート」を用いる。
- 叙述と考えをつなげる方法を定着させるため、視点を明確に示す。
- 意見の出し合いだけにならないよう、ホワイトボードを使ってグループで考えを1つにまとめる活動を設定する。
- 全体交流がグループの意見発表にならないように、自分との類似点や相違点、いいと思う点を発表するよう視点を明確にする。
- 自分の考えの積み上げが可視化できるように、「プラタナスシート」を活用する。

(2) 指導の実際(本時6/9 プラタナスの木の切り株に四人が乗る場面)

【ねらいとする子どもの姿】

最初は興味のなかったプラタナスの木に対して大切に思う気持ちが強くなったことに気づき、四人の木への思いを「プラタナスシート」に表すことができる。

このような姿を目指して、次のような3つの対話活動を仕組んだ。

問いを見つける活動	・「問いシート」と挿絵から、子どもたちが納得できる問いを選択する。
テキストとの対話	・「問い」に対する自分の考えを本文や挿絵を通して考える活動。
他者との対話	・自分の考えを他者と交流し、グループで一つの考えにまとめて、ホワイトボードに表す活動。 ・他グループと似ているところ、違うところを見つけて発表する活動。
自分との対話	・対話を通してまとまった考えをプラタナスシートに表す活動。

① 出会う段階【テキストとの対話①】

まず、前時との4人の気持ちの大きな違いを確認してから音読させ、そのあと、「問いシート」と本時の挿絵から、どの問いで学習していくと4人の気持ちが分かるかという視点で本時の「問い」を決定し、自分の考えを書く活動を仕組んだ。

《考察》

「問いシート」から本時の「問い」を確認することで、スムーズに子どもたちは「問い」を意識することができていた。実践Ⅰと流れを大きく変えていないので、学習パターンが定着できていたため、多くの子どもが自分の考えを進んで書くことができた。

② 考える段階【テキストとの対話②】【他者との対話①】

この段階では、テキストとの対話と他者との対話を通して考えをつくらせた。手順は次のとおりである。

- 1) 自分の考えをそれぞれ発表し合う。
- 2) 「問い」に対する「答え」をグループで話し合っ
てホワイトボードにまとめる。

一人の意見を採用するグループや、それぞれの意見をまとめて文章化するグループがあり、対話を通して

友達の考えを知り、まとめていくことで自分の考えを深めることができていた。(写真4)



【写真4】グループでの対話

③深める段階〔他者との対話②〕

この段階では、次のような手順で「他者との対話②」を仕組み、考えを深めさせた。

- | |
|---|
| 1) それぞれのグループでまとめた「問い」に対する考えを黒板に掲示する。 |
| 2) 全部のグループが掲示するまでは、自分たちの考えと似ている点や違う点をワークシートに書き込む活動を仕組む。 |
| 3) その後全体で比べて気づいた点を発表し、全体の考えを確認する。(写真5) また、ゆさぶる発問を通して、より「問い」に対する考えの明確化を図る。 |



【写真5】グループ同士の比べ合い

《考察》

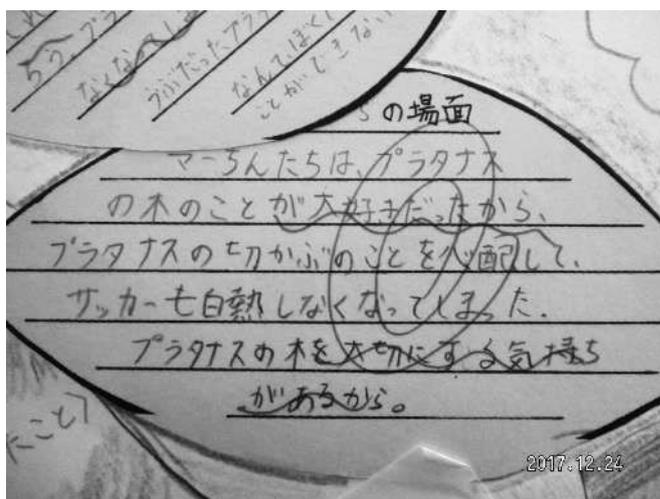
ホワイトボードに書かれている、グループごとの類似点や相違点を交流することで、考えが強化されたり、深まったりした姿がみられた。

④生かす段階〔自分との対話〕

「わたしのプラタナスシート」に自分の「問い」に対する考えを書き込ませた。ここでは、〇〇の文から～のように思ったと具体的に述べるよう書き方を提示した。また、グループで考えたことだけでなく、黒板に掲示してある他グループの意見を参考にして書くよう助言しながら書かせた。

《考察》

(写真6)はA児のプラタナスシートに貼ってあるカードである。初めはサッカーをしに公園に来ていたのに、そのサッカーが白熱しなくなるほどプラタナスの木を大切に思うようになっていったことが書いてある。叙述をもとに四人の気持ちを想像し、自分の考えを書くことができていることが分かる。



【写真6】プラタナスシート

(3) 実践Ⅱの成果(○)と課題(●)

- 「問いシート」を用いたことで、子どもが自分の作った問いとして課題意識の継続に結び付いた。
- プラタナスシートにまとめていくことで、四人の木に対する気持ちの変容が可視化できたり、シートが完成していくことを見ることができたりして意欲につながった。
- 実践Ⅰからの積み上げもあって、グループでの対話が円滑にできていた。また、ホワイトボードにまとめていくことで、考えを広げたり深めたりすることができた。
- 「他者との対話②」において、他のグループと比較しながら意見を交流したことで、考えを深めることができた。
- ゆさぶる発問があまり効果的な発問ではなかったため、思考をさらに深めさせることができなかった。

10 研究のまとめと今後の課題

(1) 全体考察

図2は、7月と11月に行った子どもの意識調査の結果を比較したグラフである。

結果として、4つの項目の全てが伸びた。特に、「問いをもって学習しているか」「友達の見解になるほど感じる時はあるか」の項目では、「問い」や「対話」を意識した学習を仕組んできたことによって、以前よりも伸びたことが分かる。

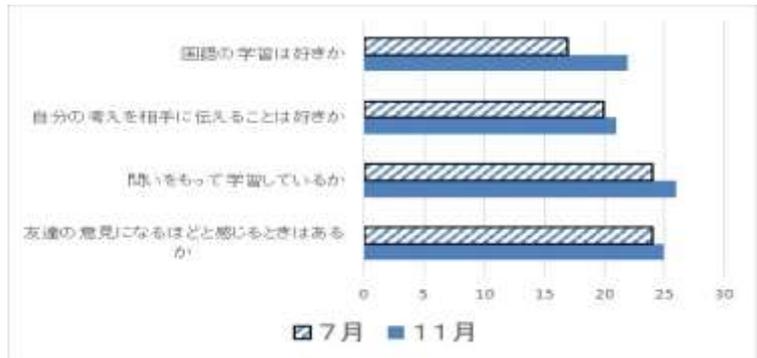
「自分との対話」では、学習プリントや、単元を通して完成させたワークシートを比較すると、29人中26人が友達の見解を自分の考えに付け足したり、自分が気づかなかった視点に考えを変えたりして考えを深め、「ごんぎつね」より「プラタナスの木」では自分の考えをより多く書くことができた。(写真7)

「友達との対話」では、A3用紙やホワイトボードなどの交流の場を設けることで、発表が苦手な子も、友達のまねをしたり友達からアドバイスをもらったりしながら全員が発言する機会をもつことができた。一方で、ひとりひとりが主体的に活動するためにも、輪番で司会などを設定して交流する必要がある。

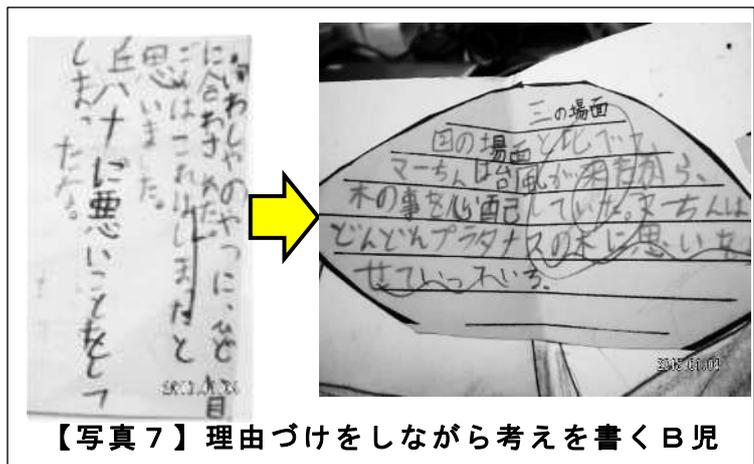
(2) 研究の成果(○)と課題(●)

- 「問い」を子ども自身に考えさせたり「問いシート」を使って学習の中心の「問い」を明確にすることは、単元を通して課題意識をもって活動する上で有効だった。
- 「テキストとの対話」「他者との対話」「自分との対話」の流れを通して学習させることで、自分の考えをつくったり、グループや全体での交流で考えを深めたりすることができた上で有効だった。
- 人物関係図や一枚のシートに考えをまとめる「プラタナスシート」のような言語活動は、動作的で自分の考えを可視化することはできたので、子どもたちも意欲を持って取り組むことができ、また単元を貫いて活動したため、見通しをもって学習をする上で有効だった。
- 文学的文章の「問い」を見つける上で、どのように見つけたらよいかなど視点を明確にして、単元に入る前の音読等で考えさせる必要がある。
- ゆさぶる発問においては、思考を深めさせる発問であるかどうかを吟味し、工夫していく必要がある。

(参考文献)・学習指導要領「国語編」文部科学省 ・物語の授業 白石範孝著
・小学校国語科 アクティブラーニングの指導技術50 藤田伸一著



【図2】7月と11月のアンケート結果の比較



【写真7】理由づけをしながら考えを書く児童